メッセージアウトライン
# サムエル記第一30:1～31
# 「アマレク追撃」

［1-2］「ダビデとその部下が三日目にツィクラグに帰ったとき、アマレク人はすでに、ネゲブとツィクラグを襲っていた。彼らはツィクラグを攻撃して、これを火で焼き払い、そこにいた女たちを、子どもも大人もみな捕え、一人も殺さず、自分たちのところへと連れ去っていた」

イスラエルの北部でペリシテ軍とイスラエル軍の全面戦争が始まる前に、ペリシテ人であるガテの王アキシュに同行していたダビデとその部下たちは、他のペリシテ人の領主たちの反対を受け、戦場から帰されることになった。彼らが住んでいたツィクラグまで帰るのに徒歩で三日かかる。

そして彼らがその地に帰ってみると、何とそこはすでにアマレク人が襲い、町を焼き払い、女たちを大人も子どももみな捕え、一人も殺さず、連れ去っていたのである。もちろん老人もいたであろう。

アマレク人はネゲブからシナイ半島にかけて住む遊牧民である。先祖はイスラエル（ヤコブ）の兄エサウである。→創世記36:12　アマレク人たちはペリシテ人とイスラエル人の全面戦争がイスラエル北部で始まるのに乗じて、男たちが手薄になったユダヤ南部のネゲブやツィクラグを襲ったのであろう。

「一人も殺さず」というのは彼らをエジプトの奴隷市場で売るつもりだったと考えられる。

[3-5]「ダビデとその部下が町に着いたとき、なんと、町は火で焼かれていて、彼らの妻も息子も娘も連れ去られていた。ダビデも、彼と一緒にいた兵たちも、声をあげて泣き、ついには泣く力もなくなった。ダビデの二人の妻、イズレエル人アヒノアムも、ナバルの妻であったカルメル人アビガイルも連れ去られていた」

牛や羊などの家畜はもちろん、家財道具、金銭、そして最愛の妻や子どもたちも奪い去られていたのである。ダビデや部下たちの落胆や嘆きは非常に大きなものであった。彼らはこの惨状を見て泣きに泣き、ついには泣く力もなくなった。大の男が泣くとはみっともないと思うのは、このような惨状を経験していない者の言うことであろう。

[6]「ダビデは大変な苦境に立たされた。兵がみな、自分たちの息子、娘たちのことで心を悩ませ、ダビデを石で打ち殺そうと言い出したからだった。しかし、ダビデは自分の神、主によって奮い立った」

兵たちはみなダビデを石で打ち殺そうと言い出した。…石で打ち殺すとはイスラエルでは指導者を最終的に拒否する行為である。→出17:4　ステパノもパウロも石で打たれた。→使徒7章、14:19

その理由は
①自分たちの妻、息子、娘たちそして財産が奪い取られた。
②彼らはもともと不満分子の集まりで、何かのきっかけで爆発しやすかった。→22:2
③主なる神が与えてくださったイスラエルの地から異邦人のペリシテ人の国へ落ちのびたことに対する宗教的反感がもとからあった。
④同胞イスラエル人との戦いにダビデが参戦しようとしたことに対する神の呪いかと思った。
⑤三日の長旅の後、町まで焼かれて、無一物となり、休むこともできない肉体的疲労。
それゆえ、ダビデは万事休すともいうべき非常な苦境に陥った。私たちならどうするだろう。
　しかし、それに対するダビデのふるまいは金文字で記されてもよいことばである。「**しかし、ダビデは自分の神、主によって奮い立った**」もしダビデがこの時に意気消沈したままで、沈黙をしていたならば、本当に石で打たれていたかもしれない。周りは四面楚歌ともいうべき状況である。彼はそのような中で屈することなく、今まで彼を導き、守り、支えて来た主なる神に全面的により頼み、奮い立ったのである。「自分の神」と書かれているのは、イスラエルの主なる神を信じる信仰を同じくするはずの自分の部下たちから何の助けもなく、かえってさばくような目で見られていたからであろう。このような時、頼るべきお方は、人間ではなく、主なる神のみであり、彼はその原点に立ち返ったのである。
[7-8]「ダビデは、アヒメレクの子、祭司エブヤタルに言った。『エポデを持って来なさい。』エブヤタルはエポデをダビデのところに持って来た。ダビデは主に伺った。『あの略奪隊を追うべきでしょうか。追いつけるでしょうか。』すると、お答えになった。『追え。必ず追いつくことができる。必ず救い出すことができる。』」
「エポデ」は大祭司の着る祭服で、そこに付属しているウリムとトンミムという主のみこころを伺う道具で、ダビデは今までもたびたび、主のみこころを伺っていた。そして、今、ダビデが略奪隊追跡について主のみこころを伺った結果、主の答えは、追え、必ず追いついて、救い出すことができるというものであった。
[9-10]「ダビデは六百人の部下とともに出て行き、ベソル川まで来た。残ることになった者は、そこにとどまった。ダビデと四百人の者は追撃を続け、疲れ切ってベソル川を渡れなかった二百人の者が、そこにとどまった」
　「ベソル川」…ベエル・シェバの南約20キロメートルのネゲブの山地から西に流れ、ガザの南約10キロメートルの地点で地中海に注いでいる川。六百人の者が追跡したが、ツィクラグまでの三日間と、さらに続く強行軍で疲れ切って川を渡れなかった者たち二百人がそこにとどまった。ツィクラグからここまでで約30キロメートルある。
そして四百人の者が川を渡って、さらに追撃を続けた。

[11-12]「兵たちは野で一人のエジプト人を見つけ、ダビデのところへ連れて来た。彼らは彼にパンをやって、食べさせ、水も飲ませた。さらに、ひとかたまりの干しいちじくと、二房の干しぶどうをやると、そのエジプト人はそれを食べて元気を回復した。彼は三日三晩、パンも食べず、水も飲んでいなかったのである」

干しいちじくや干しぶどうは旅行などに携帯する保存食で兵たちは皆それを持っていた。このエジプト人を介抱したのは、人道的なものというより、アマレク人に対する情報を得るためであったであろう。

[13-14]「ダビデは彼に言った。『おまえはだれのものか。どこから来たのか。』すると答えた。『私はエジプトの若者で、アマレク人の奴隷です。私は三日前に病気になったので。主人は私を置き去りにしたのです。私たちは、クレタ人のネゲブと、ユダに属する地と、カレブのネゲブを襲い、ツィクラグを火で焼き払いました。』」

彼はダビデの質問に答えて、自分はエジプト人でアマレク人の奴隷であり、三日前に病気になり、置き去りにされたこと、自分たちはネゲブやユダに属する地を襲い、ツィクラグを火で焼き払ったことなどを知らせた。

アマレク人たちは多くの捕虜を得ていたので、病気になったエジプト人奴隷を足手まといとして置き去りにしたのであろう。ネゲブは乾燥地帯という意味であり、クレタ人やカレブ人はその地に住んでいた遊牧民である。ユダに属する地とはユダ南部のやはりネゲブに近い地にあった町であろう。

[15]「ダビデは彼に言った。『その略奪隊のところに案内できるか。』彼は言った。『私を殺さず、主人の手に私を渡さないと、神にかけて誓ってください。そうすれば、あの略奪隊のところに案内いたします。』」

彼は略奪隊のいる場所を知っていた。これこそダビデたちが知りたかったことである。ダビデは彼のことばに答えて、神にかけて誓い、案内させただろう。

[16-17]「彼はダビデを案内して行った。すると、なんと、アマレク人たちはその地いっぱいに散って食べたり飲んだりし、お祭り騒ぎをしていた。彼らがペリシテ人の地やユダの地から奪った分捕り物が、とても多かったからである。ダビデは、その夕方から次の夕方まで彼らを討った。らくだに乗って逃げた四百人の若者たちのほかは、一人も逃れることができなかった」

「その地いっぱいに散って」とはアマレク人の多さを強調する表現。「…お祭り騒ぎをしていた」とは、その戦果の大きさゆえの飲めや歌えのお祭り騒ぎであろう。彼らはペリシテ人とイスラエル人が戦いをしているので、自分たちが攻撃されるとは思っておらず、油断していた。

それでダビデとその部下たちはその日の夕方から次の日の夕方まで彼らを襲い、討った。ダビデたちは二十四時間戦いを続けたことになる。それゆえ、多くのアマレク人たちが倒された。それで、逃げることができたのは、らくだに乗って逃げた四百人のアマレクの若者以外にはなかった。らくだは本気を出して走れば、砂の上でも

時速50キロメートルで走れるという。そのようならくだを徒歩で追いかけることはできない。
[18-19]「ダビデは、アマレクが奪い取ったものをすべて取り戻した。ダビデは、二人の妻も救い出した。子どもも大人も、息子たちも娘たちも、分捕られた物も、彼らが奪われた物は、何一つ失われなかった。ダビデは、これらすべてを取り返した」
　ダビデとその部下は自分たちが失ったすべてのものを取り戻すことができた。妻も息子、娘たちも、持ち物もすべてである。もしその中の何人かが殺されていたならば、ダビデは部下たちから恨みを買ったかもしれない。主は最善の配慮をしてくださることを改めて教えられる。
[20]「ダビデはまた、すべての羊と牛を奪った。兵たちは家畜の先に立って導き、『これはダビデの戦勝品だ』と言った」
　この羊と牛はアマレク人が所有していたものである。彼らは遊牧民族であるので、常に家畜とともに移動していた。　そしてそれはダビデの戦勝品となった。
[21-22]「ダビデは、疲れてダビデについて来ることができず、ベソル川のほとりにとどまっていた二百人の者のところに来た。彼らは、ダビデと彼に従った者たちを迎えに出て来た。ダビデは、この人たちに近づいて彼らの安否を尋ねた。ダビデと一緒に行った者たちのうち、意地の悪い、よこしまな者たちがみな、口々に言った。『彼らは一緒に行かなかったのだから、われわれが取り戻した分捕り物は、分けてやるわけにはいかない。ただ、それぞれ自分の妻と子どもを連れて行くがよい。』」
　ダビデは疲れ切ってベソル川のほとりにとどまっていた二百人の者たちのところに戻ってきた。彼らはダビデたちを迎えに出て来て、ダビデは彼らの安否を尋ねたが、ここで一つの問題が起こる。それはダビデと一緒に行った者の中の意地の悪い、よこしまな者たちが、取り戻した分捕り物は分けてやらず、ただそれぞれの妻と子どもだけを連れて行くようにと言ったのである。
このようなことはいつの時代でも起こりうることである。
[23-25]「ダビデは言った。『兄弟たちよ。主が私たちに下さった物を、そのようにしてはならない。主が私たちを守り、私たちを襲った略奪隊を私たちの手に渡されたのだ。だれが、このことについて、あなたがたの言うことを聞くだろうか。戦いに下って行った者への分け前も、荷物のそばにとどまっていた者への分け前も同じだ。ともに同じく分け合わなければならない。』その日以来、ダビデはこれをイスラエルの掟とし、定めとした。今日もそうである」
　ものごとに関する一つの発言が、後にもめごとや不和、分裂を引き起こすことがあるが、ダビデはそうはさせなかった。彼はアマレクの略奪隊を追討し、打ち破り、奪われた妻子や分捕り物を取り返すことができたのは、主が私たちを守り、略奪隊を私たちの手に渡されたからだと、主に栄光を帰して言う。それで「だれが、このことについて、あなたがたの言うことを聞くだろうか」といさめ、戦いに下って行った者も、荷

物のそばにとどまっていた者もその分け前は同じで、ともに分け合わなければならないと言った。そしてダビデはこれをイスラエルの掟とし、定めとしたのである。
「今日もそうである」とはこのサムエル記が書かれた時代のことである。
[26]「ダビデはツィクラグに帰って来て、友人であるユダの長老たちに戦勝品の一部を送って言った。『これはあなたがたへの贈り物で、主の敵からの戦勝品の一部です。』」
　ダビデは有り余る戦勝品をすべて自分たちのものとせず、かつて自分とその部下たちが逃避行を続けたときに自分たちを支え守ってくれた人々を忘れず、それらすべての場所の長老たちにアマレク人たちからの戦勝品の一部を贈り物として送った。このことは彼の人徳を表すとともに、彼が偉大な戦略家であったことをも示している。
[27-31]「その送り先は、ベテルの人々、ラモテ・ネゲブの人々、ヤティルの人々、アロエルの人々、シフモテの人々、エシュテモアの人々、ラカルの人々、エラフメエル人の町々の人々、ケニ人の町々の人々、ホルマの人々、ボル・アシャンの人々、アタクの人々、ヘブロンの人々、すなわち、ダビデとその部下がさ迷い歩いたすべての場所の人々であった」
　ここに記されている町々はすべてユダのネゲブにあるが、ほとんどは詳しい場所は不明である。
「ヘブロン」はエルサレムから南へ30キロメートルの地。
　本日の箇所から教えられることは何か。
逆境や危険の中で、主を信じ、主により頼み、主によって奮い立つことは素晴らしい結果をもたらす。これはダビデだけに与えられた特権ではなく、すべて主なる神を信じる信仰者にも当てはまることなのである。→ローマ8:31, ピリピ4:13、Ⅱコリント1:8~10